



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

森林・草原のモニタリングでは、樹木を長期的な環境変化の指標として、地表徘徊性昆虫を短期的な環境変化の指標として、鳥類を広域的な環境変化の指標として取り上げ、20 のコアサイト、28 の準コアサイト、約 420 の一般サイトで調査を行なっています。

- ・コアサイト： 毎年調査を行ない、毎木調査、落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、鳥類調査を実施
- ・準コアサイト： 5年に一度(一部は毎年)調査を行ない、毎木調査、鳥類調査を実施
- ・一般サイト： 5年に一度調査を行ない、鳥類調査を実施

鳥類調査では、各サイトに 5 か所の定点を設置し、繁殖期と越冬期にそれぞれ 2 日間かけて 4 回(1 地点 1 回あたり 10 分間)、周囲に生息している鳥類の個体数調査を実施しています。

「陸生鳥類調査情報」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年より毎年 2 回発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことができます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査 情報

2018年 2月号 Vol.9 No.2

Carduelis flammea
Photo by Kaoru Fujii

結果速報

モニタリングサイト1000 2017年度繁殖期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000か所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみを実施）を行っています。2017年度の繁殖期は、調査を73サイト（森林62サイト・草原11サイト）にお願いしました。そのうち、依頼した中から調査を実施できなかったサイトなどを除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林54サイト、草原11サイトの計65サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類(2017年度)

合計139種（森林107種・草原94種）の鳥類が確認されました。調査地点数が多く過去との比較が可能な森林サイトの確認種数をもとに、今年の種数について検討してみます。昨年は森林66サイトの調査で、129種が記録されました。つまり、昨年と今年を対比すると、調査地点数が10サイト以上少なく、確認種数も少なかった状況です。サイト数が増えると確認される種数も増加することが、これまでのモニタリングサイト1000の結果からわかっています。また、ここ5年の種数は109-129種でしたので、これらを考慮すると、今年はやや若干少なめの種数と言えそうです。

出現率と優占度

出現率、優占度の上位種を表1・2に（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数、優占度：サイトごとの「ある種の個体数÷総個体数」を全サイトで平均したもの）、2012年からの森林における出現率上位種の順位変動を図1に示しました。この図から、これまでの最上位各種の順位の安定性と、今年の結果が過去の傾向を維持していることがよく分かります。今年もウグイスが1位、シジュウカラが2位になっていますが、この2種のトップ2は定番の結果です。さらに、3位のヒヨドリも、過去において3位か4位であり、最上位種の状況はとても安定していることがわかります。他方、昨年のみはこの傾向が当てはまらず、ハシブトガラスが初めて出現率1位になりました。そして、この変化が昨年だけの

表 1. 2017年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 54)			b) 草原 (n = 11)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	96.3	1	ウグイス	90.1
2	シジュウカラ	88.9	1	カッコウ	90.1
3	ヒヨドリ	81.5	1	ハシブトガラス	90.1
4	キビタキ	79.6	4	カワラヒワ	81.8
5	ハシブトガラス	77.8	4	キジバト	81.8
5	ヤマガラ	77.8	4	シジュウカラ	81.8
7	コゲラ	75.9	4	ハシボソガラス	81.8
8	オオルリ	70.4	4	モズ	81.8
9	キジバト	70.4	9	アオジ	72.7
10	カケス	63	9	ヒバリ	72.7

表 2. 2017年度繁殖期の優占度の上位10種

a) 森林 (n = 54)			b) 草原 (n = 11)		
順位	種名	優占度	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	11.6	1	ウグイス	7.0
2	ウグイス	7.3	2	ノビタキ	5.8
3	シジュウカラ	5.9	3	ホオアカ	5.6
4	メジロ	5.3	4	アオジ	5.1
5	キビタキ	4.3	5	ムクドリ	4.8
6	ヤマガラ	3.9	6	オオヨシキリ	4.2
7	ヒガラ	3.8	7	モズ	3.9
8	オオルリ	3.7	8	ハシボソガラス	3.1
9	ハシブトガラス	3.5	9	スズメ	2.9
10	コゲラ	3.3	10	ヨシキリ	2.9

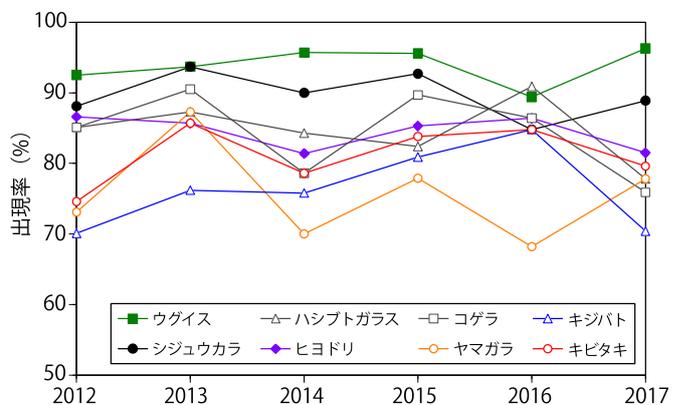


図 1. 過去6年間の森林サイトにおける出現率上位種

一時的なものであるのか、それとも新たな変化の始まりであるのかに注目していました。今年の結果をほぼ同じサイトを調査している5年前(2012年)と比べると、順位はほぼ同じでした(図1)。また、昨年を除き、過去5年間の上位種の構成が安定していたことをあわせて考えると、上位種の状況に大きな変化はなさそうで、昨年の結

果が例外的であったことが推察されます。つまり、昨年の変化は一時的なものであったようです。



カケス(撮影:三木敏史)

ほかに目立った変化は、トップ10位以内にカケスが入ったことです。昨年のカケスの順位は16位でした。つまり今年は出現率順位が6位分上昇しています。これはカケスが増加したためなのでしょう。その可能性はゼロではありませんが、カケスと同様に10位前後の出現種であるオオルリやキジバトなどは10位台とトップ10下位グループをいったりきたりしています。カケスも同様の順位変動をしていますが、これまではギリギリでトップ10に入っていませんでした。今回の結果は、いわばわずかな順位上昇です。今年の現時点での調査サイト数が例年よりも少ない影響により、山地など、カケスが確認されにくいサイトが漏れることで、たまたまギリギリ10位以内にカケスがランクインしたのかもしれませんが、トップ10入りが続かれ増加傾向にあると判断されるのか、それとも1年だけの偶然の結果なのか、今後はカケスの動向にも着目したいと思えます。

前年と比較して新たに記録された種

過去の本ニュースレターでは、毎年異なるサイトを調べているのに、大体同じような種構成や順位になることを紹介してきました。今回は少し視点を変えて、最下位の種を御紹介します。上位種は全国規模でもっとも観察された種であり、図1のとおり、毎年、ほぼ同じ結果になります。他方、最下位の種とは、記録されたりされなかったりする種です。

「昨年記録されず今年に記録された種」を表3に示しました。その特徴は、シロガシラやカラスバトのような局地的に分布する種であることです。他は、クマタカのように行動圏が広く生息数も少ない種です。これらの鳥は、多地点で記録されようがなく、記録される年があつたりなかったりするのです。普通種であっても、森林には生息しない種も最下位種になります。今回の例では、オオセグロカモメといった水鳥や、草原性の種であるツバメ類などがこれにあたります。夜行性で日中は観察が難しいミゾゴイなども同様です。

今年の結果の面白い点の一つは、一般種であるイソヒヨドリが記録されたことです。イソヒヨドリは、海沿いに生息するイメージが強い種ですが、内陸にも生息することや、内陸への進出が近年になって進んでいる可能性が指摘されています。今年、沖縄県と岩手県のサイトの計2か所で記録されました。過去の結果を見返してみると、昨年は記録がありませんでしたが、今年と同様に2サイト前後が記録

される年があり、モニタリングサイト1000の結果からは、イソヒヨドリの分布が明確に拡大しているとは言えません。増加が指摘されている本種ですから、本調査において、記録地点数が増加・拡大していくかもしれません。こうした将来の変化を比較的早く検出できる点は、他の調査にはない、この事業の特徴です。まさに“モニタリング”と言えましょう。

いかがでしたか。今回は、一見すると毎年違いが無いように見える結果でも、モニタリングの背景では様々な「気付き」があることを御紹介しました。こうした「気付き」が、生物や自然環境の変化を把握することにつながります。長期のモニタリングを行う意義と、変化がない平常の状況を把握し続けることの重要性を感じていただければ幸いです。



イソヒヨドリ♂(三木敏史)

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からも、モニタリングサイト1000が推進する長期調査を継続することの有用性の一端を感じていただけたものと思います。毎年の調査結果の積み重ねを前提として、調査設計がなされ、長期的に調査を絶えず継続していくことが重要となることを御理解いただければ幸いです。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の方々のご協力による調査継続が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2017年度繁殖期の一般サイト調査には、107名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、順不同)。

網谷由美子, 有賀正英, 有馬宏幸, 池口和三, 伊藤浩, 稲垣昌子, 梅津節雄, 梅木賢俊, 衛藤民子, 衛藤隆, 大塚育恵, 小山留美, 川崎正太, 草間由紀子, 草間理恵子, 小林宣広, 今野怜, 酒井淳一, 笹原裕二, 猿子正彦, 清水伸彦, 城戸美智子, 杉原廣, 大畠文雄, 大門聖, 田垣内政信, 田川亭, 瀧本宏昭, 棚邊美根子, 谷岡仁, 谷上和年, 谷口秀樹, 谷口陽香, 長谷部真, 葉山政治, 久野文廣, 牧野清助, 増田裕, 溝口文男, 揉井千代子, 森本元, 安西恵子, 幸徳行, 鷺田善幸, 渡辺茂男, 井上かよ子, 井上史子, 一戸静夫, 奥田孝一, 横山大八, 岡垣大志, 梶畑哲二, 関川實, 江口初男, 高田令子, 高野茂樹, 佐久間仁, 佐々木均, 三浦憲悦, 山形達哉, 山田洋治郎, 寺田紋子, 篠崎知明, 出口敏也, 小園卓馬, 小池宏美, 小池重人, 上谷川則男, 上野吉雄, 森本章男, 瀬川強, 西出隆, 西村公志, 青山輝久, 川崎康弘, 船橋功, 前田和浩, 村中政文, 村田恵美子, 村田章, 村濱史郎, 大岩憲治, 瀧川二士男, 丹野栄一, 丹野弥生, 池野進, 竹丸勝朗, 中原聡, 中曾根久子, 中村進, 中村聡, 辻義次, 藤原美菜, 藤原正貴, 藤島牧子, 藤島光俊, 平野敏明, 米倉静, 野津幸夫, 柳田弘子, 柳田和美, 林謙治, 林克之, 鈴木滋, 鈴木創, 濱田哲暁, 齋藤仁志

表 3. 森林サイトにおいて2016年度に記録されず2017年に記録された種(50音順)

イソヒヨドリ	コウノトリ	チュウシャクシギ
オオセグロカモメ	コシアカツバメ	ドバト
カラスバト	サメビタキ	ミゾゴイ
クマタカ	シロガシラ	リュウキュウツバメ

結果速報

2017年度 コア・準コアサイト鳥類調査 繁殖期結果報告

植田 睦之(バードリサーチ)

2017年の繁殖期は、27の森林サイトで調査を行いました。これまでの記録種数をみると(表1)、多少の増減はあるものの、各サイトにおける毎年の種数は比較的安定していました。この傾向は年変動の大きい越冬期と比べて顕著で、バイオマスについても同様の傾向があり、繁殖期の森林鳥類の生息状況の安定性が今年も確認できました。

表 1. 2009~2017年繁殖期コア/準コアサイトの確認種数

	2009	10	11	12	13	14	15	16	17
足寄	27	33	30	30	34	28	28	28	31
雨龍	33	27	36	32	29	25	29	31	26
苫小牧	26	28	24	25	29	24	23	29	28
カヌマ沢	20	21	24	19	22	24	23	23	21
大佐渡	25	32	27	31	27	32	25	28	29
小佐渡	30	33	28	27	32	29	29	31	35
小川	22	24	25	26	33	30	28	28	21
那須高原	30	36	32	32	28	31	27	32	32
大山沢	27	36	29	27	30	29	30	29	25
秩父	33	38	28	29	31	31	28	31	29
カヤの平	22	23	25	29	27	27	30	20	26
おたの申す平	19	20	14	17	22	23	20	17	23
愛知赤津	23	19	22	18	22	22	19	26	23
芦生	25	25	20	22	17	25	17	23	23
上賀茂	23	22	16	21	21	23	26	19	17
和歌山	24	19	19	23	21	20	20	21	21
市ノ又	20	21	18	22	23	19	18	22	22
綾	22		24	23	25	25	18	20	21
田野	22		25	20	24	22	24	22	22
与那	16	17	16	17	17	16	20	16	16
奄美	19	18	16	17	16	18	17	17	17
大雪山					32				
野幌		31				31	23	27	28
大滝沢	23				24				
早池峰		22					25		
青葉山	26					24	24	25	27
金目川		35					31		
高原山	27				34				
筑波山	28				28				
西丹沢	24				32				
富士			30						
函南		27					27		
御岳濁河		22					23		
木曾赤沢	20				16				
三之公						24			
春日山			25					24	
大山文珠越			23					31	
半田山				15				21	
臥龍山			23						26
宮島	21					23			
佐田山				16					18
対馬龍良山				14					21
粕屋			20						23
椎葉		26				22			
屋久島スギ林				15					13
屋久島照葉樹林		14							18
西表	15								14
小笠原石門			4						6

苫小牧サイトでも起きているシカの影響

近年、シカの影響による藪を利用する鳥の減少が起きています。これまで、秩父大山沢での状況を報告してきましたが、同様のことが北海道大学苫小牧研究林でも起きていました。

藪の鳥が減少、キツツキが増加？

苫小牧サイトの林床は、一面スズタケに覆われているのですが、シカの採食により、その丈は低くなり、密度もまばらになってきています(図1)。



図 1. スズタケが低く、疎らになってしまった苫小牧サイトの林床

その影響か、これまでの調査結果をみてみると、苫小牧サイトに生息している藪の鳥、ウグイスとコルリが急激に減少しています(図2)。ウグイスは調査開始から一貫して減少しており、2014年以降記録されなくなりました。コルリは記録の変動が大きいですが、今年こそ記録があったものの、2015年以降、ほとんど記録されなくなっています。

興味深いことに、時期を同じくして、アカゲラ、コゲラといったキツツキが増加しています(図2)。奈良県の大台ヶ原ではシカが樹皮を食べることにより樹木が枯死し、キツツキ類が増加したことが知られています。しかし、苫小牧サイトはそこまでのシカの被害はありません。シカと関係した増加なののでしょうか？ それとも森林の成熟等に伴って増加しているのでしょうか？ 今後の変化に注目していきたいと思います。

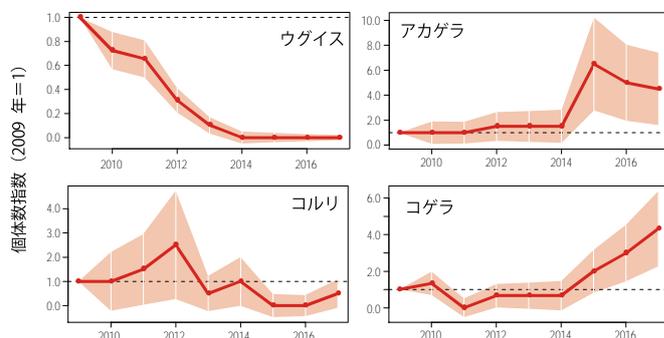


図 2. 苫小牧サイトでの各種鳥類の個体数変化

調査へのご協力ありがとうございました

2017年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田睦之、上野あや、梶田 学、川崎慎二、金城孝則、今野 怜、佐々木務、貞光隆志、外間 聡、高美喜男、瀧本宏昭、竹田山原楽、谷脇智和、千葉 舞、知花重治、中村 豊、西 剛、濱田哲暁、日比野政彦、平野敏明、堀田昌伸、柳田和美、梁瀬桐子(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

事務局からのお知らせ

全国鳥類繁殖分布調査 地域的な違いが見えはじめました 植田陸之(ハードリサーチ)・葉山政治(日本野鳥の会)

2016年から始まった繁殖分布調査。この2年間で、1,276人の方に調査にご参加いただき、1,078コースの調査をすることができました。情報が多くなってきましたので、全国的な傾向だけでなく、地域の傾向も解析できるようになりました。

オオヨシキリは北海道では分布拡大

北海道は日本の一番北にあるだけに、ほかの地域と分布の変化傾向が違う種がいくつかありました。

南へと分布を拡大しているハクセキレイは、全国的に新たに記録されたコースが多かったのですが、北海道だけは逆に今回記録されなくなったコースの方がやや多く見受けられました。また、全国的には個体数が減少していると言われているオオヨシキリが、北海道では分布を拡げていました。過去の記録と今回の記録を比べてみると、北海道では、ほぼ全域で新たに見られるようになった調査地がありますが、特に道東では、今まで見られなかった地域への分布拡大が見られています。



オオヨシキリ(写真:池田 昇)

北ではそれほど減っていないゴイサギ

東日本でも北の方で分布の変化傾向が異なっている傾向がありました。たとえばアオゲラ。南方系のこのキツツキは、東北地方や中部の日本海側の地域など、北の方でより分布の拡大が顕著だということがわかりました。

また、小型の魚食性の鳥の分布の縮小が顕著だということを前号のニュースレターでご報告しましたが、その一つゴイサギも全国的に分布が縮小しています。しかし、東北・中部日本海側地域だけは例外で、分布を縮小させてはいませんでした(図1)。

東北でゴイサギを見ている人に状況を聞いたところ、東北でもゴイサギの数は減っている印象があるそうです。数は減っているけれども他地域よりその程度は小さく「分布が変わるほどではない」ということなのかもしれません。今後

の変化を注視していきたいと思えます。

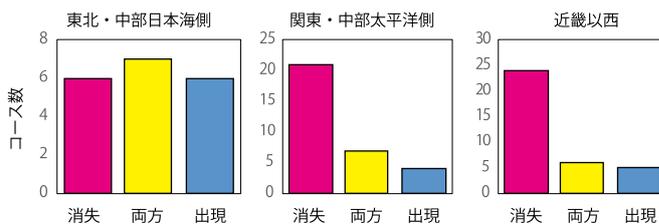


図1. ゴイサギの分布変化の地域比較。関東以西は「消失」の割合が高く、分布の縮小が顕著だが、東北や中部日本海側の地域では顕著な変化が見られない。

大陸系の鳥の繁殖が見られる西日本

大陸に近い西日本では、大陸系の鳥の繁殖が記録されています。西中国山地では既にシロハラ(上野ほか 1993)やミヤマホオジロ(上野ほか 1995)の繁殖記録があります。今回の調査でもこれらの鳥が対馬から中国地方、四国にかけて点々と記録されました。

また、なかなか繁殖の確認ができないため、「渡り通過」としての記録ですが、セグロカッコウの記録も各地から届いており、オニカッコウの越夏記録の報告もありました(浜地ほか 2017)。これらの鳥は、今後、西日本で繁殖が記録されるかもしれない注目種と言えます。



西日本で繁殖するようになってきているミヤマホオジロ(写真:豊田敏則)

調査へのご協力をお願いします

たくさんの方々の協力のおかげで以上のようなことが見えてきました。しかし都道府県によってはまだ調査地の登録や実施が進んでいない地域もあります(表1)。こうした都道府県にお住まいの方にはぜひ調査に参加いただけたら幸いです。また、現地調査だけでなく、アンケート調査で情報を補完していく必要もあります。これ以外の地域の方もぜひ調査にご参加ください。

調査への参加登録は以下のホームページより行うことができます。登録いただけたら、調査地の情報等お送り致します。調査へのご参加、お待ちしております。

調査参加のページ: <http://www.bird-atlas.jp/>

表1 調査の登録や実施の進んでいない都道府県の調査地のうち調査者の決まったコースの割合と調査が実施されたコースの割合

都道府県	登録率	都道府県	実施率
高知県	30.4	佐賀県	6.7
岩手県	36.9	鹿児島県	17.1
沖縄県	47.1	群馬県	17.5
福島県	49.3	岩手県	23.8
群馬県	52.5	高知県	26.1
鹿児島県	56.6	宮崎県	31.0
北海道	59.8	島根県	36.8
愛媛県	60.0	沖縄県	37.3
島根県	60.5	山形県	37.3
福岡県	60.5	北海道	38.1

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000

研修・交流会レポート

野口真磨子（日本野鳥の会）

研修会を終えて・・・

モニタリングサイト1000の事業は多くの市民調査員のみなさまのご協力によって運営されています。本調査も今年度で14年目を迎え、現在、第3期とりまとめに向けたデータの解析を進めています。モニタリングサイト1000のように大規模かつ長期的な事業を継続していくためには、調査員の確保とモチベーション維持、また調査手法の共有は欠かせないものです。しかし、近年は各地の調査サイトで調査員の高齢化や後継者不足が課題となっています。

この事業の一環として、課題でもある次世代の調査員の確保と調査員同士の交流・情報交換の場となることを目的に、研修会を毎年全国各地で開催しています。2017年度は長野、佐賀、東京の3か所で開催しました。今回の研修会は、モニタリングサイト1000の事業内容や調査方法を学んでいただくとともに、参加者の方に日頃の活動を紹介していただく時間を設けました。長野会場では、日本野鳥の会諏訪支部の林さんから、諏訪地方の猛禽類の保護活動の話をしていただきました。今年初めて調査をお願いした酒井さんからは、青森で研究されていたオオバンの子鳥の食物内容とヒナに対する給餌内容に関する調査の結果や、鳥に寄生するシラミバエの話をしていただきました。佐賀会場では、日本野鳥の会佐賀県支部で地元の小学校低学年への普及のために行っている環境教育のプログラム「野鳥座」で使用している寸劇のDVDの上映をしていただきました。時間の関係で最後まで見ることは出来ませんでしたが、地元の小学生を対象に分かりやすく鳥類を取り巻く環境とそのつながりを伝える劇となりました。この野鳥座を通して鳥に興味を持つ若い人が増え、ひいては将来の調査員が生まれるのではと期待が膨らみました。東京会場では、総合研究大学大学院の加藤さんからスズメの巣箱利用に関する研究を、動画などを交えながらご紹介いただきました。身近な鳥類の研究成果に参加者の方々

も興味津々でした。

これまでも研修会への参加をきっかけに、新たな調査員として本事業に加わってくださった方もいらっしゃいます。来年度以降も、初心者の方でも調査活動に関心を持ってくださるような、また現役の調査員の方がより活発に活動できるような研修会を計画していきます。研修会を自分たちの地域で開いてほしいという方は是非、事務局までご連絡いただければと思います。今後ともよろしく願い致します。

研修会参加者の声

<長野会場：杉山 直さん>

11月4～5日に長野県富士見町で開催された研修会に参加させていただきました。

学生時代には大学のサークルで調査活動をしたり、当時の環境庁が行っていた緑の国勢調査に参加していましたが、最近は機会がなくモニ1000にも参加していませんでした。今回は新しい調査方法を身につけたいという思いで参加しました。話を聞く中でラインセンサスよりスポットセンサスの方が精度が高いという実証データや、成果として見えてきた近年の鳥類相の変化はとても興味深いものでした。

2日目の実地訓練では声で確認するときの距離の判断や植生を高さごとの断面で記録することの難しさを実感しました。繁殖期で一斉に囀っている状況の中では1人で記録をつけながらの調査にも不安を感じました。

近くの調査地はすでに担当者が決まっているため、私自身がモニ1000に参加することは難しそうです。でも、支部でこの手法を活用した調査を行うことで、質の高い記録を残すと共に後進の育成を図ることができ、今回学んだことを生かせそうです。まずは自分のフィールドで実践することで技術を磨きながら、しっかりと記録を残したいと思えます。

有意義な2日間でした。ありがとうございました。

<佐賀会場：青柳 良子さん>

野鳥の会に入会して10年余り。自信を持って「あの鳥は〇〇」と言える鳥の種類もまだ少なく、「鳥類調査」と言われても私には遠い次元の課題であるように感じていました。しかし、わざわざ東京から講師の方々がいらして下さるので、「野鳥を知るために」参考になることがあるに違いない。お話を聞くだけでも・・・と思い、参加を決めました。会場となった「ゆめぷらっと小城」の近くに住んでいらっしゃる会員に電話してみました。「とても難しそうで自信がない・・・」と思っていた方がほとんどでしたが、「行ってみましょうよ」と誘いかけてみたら、皆さん気持ちのいいお返事で集まって下さいました。

野鳥の生活環境が厳しくなっていることは、私達の毎日の生活の中でも感じ取ることもできますし、テレビ・新聞などの報道からも感じます。私達の身近な話題で挙がる「イソヒヨドリが海岸だけでなく内陸部でも観られるようになった」とか「10年ぐらい前にはトラフズクが何羽も来ていた



佐賀県林業試験場で実際の調査方法を実践中

のに・・・」「アオバズクの子育てもあちこちで観られたのに・・・」などというのも、きちっとしたデータがあれば「なぜそうなのか」という原因を探ることもできるでしょうし、何か対策をたてることができるかも知れません。全国1000か所で100年という膨大なスケールの調査ですがホントに大切なことだなと感じました。

林業試験場での実習では、鳥の声に神経を集中させました。声で判別することは私にはまだまだ難しいのですが、先輩たちの耳を借りて調査に協力したいものと思っています。「佐賀県の調査報告」が出せるよう取り組んでいきたいと思っています。

ありがとうございました。

<東京会場:菊田 清子さん>

始めにモニタリングサイト1000事業について、概要から市民の参加する調査の位置づけまで説明いただきました。事業では、対象とする多くの生態系ごとに指標とする生物群を決め長期にわたり、計約1000サイトを調査し、その結果からタイムリーに変化をとらえ、保全対策を策定することを意図しているとのこと。このような大きなスケールの実態把握が継続したら将来にわたり日本の多様な生態系を維持することにつながるはず、と期待されます。サイトの半数近くを占める森林・草原生態系分野は、主に研究機関が調査するコアサイトとそれを補完する420の一般サイトが設定され、この一般サイトの鳥類と植生概要調査が今回研修を受ける私たちがお手伝いできるかもしれない調査です。市

民の大規模な調査がモニタリング事業の中に想定されているのは他の動植物類にはない鳥類ならではのことと思います。紹介された調査結果では、森林や草原の生態系と人の営みとの関係、シカ、外来動植物の影響等、自然環境の中で漠然と感じていることが定量的に分析されていて興味深かったです。

2日目は目黒自然教育園で実習でした。スポットセンサスで定点ごとに10分間を2分ごとに区切ってカウント。この日は冬鳥もまだ少なく、主にはにぎやかに鳴きかわすヒヨドリを数えるのんびりしたものでしたが、これが初夏の早朝の草原だったらどんなにか声と姿を忙しく追うことになるのだろうかと思惟しました。

講師スタッフのみなさまのおかげで充実した2日間でした。ありがとうございました。



東京会場での室内講義の様子

越冬分布調査にご協力ください

全国鳥類繁殖分布調査にあわせて、現在、越冬分布調査も行なっています。決まったコースで調査を行う繁殖期とは異なり、普段の観察記録をアンケートで情報収集しています。ぜひみなさんの普段の観察記録をお送りください。

支部の探鳥会の記録やバードリサーチの「フィールドノート」や「さえずりナビ」に入力いただいた調査結果は、データを使うことができるので、再送信いただく必要はありません。それ以外の記録をぜひお送りください。

対象種	留鳥、漂鳥、冬鳥など、越冬するすべての鳥類
対象期間	2016-2020年の越冬期
必要な情報	観察場所、観察日(月まででもOK)、種名
送信方法	Excelファイルで送っていただく方法とWEBフォームから送る方法があります。右記のホームページから、送信、フォーマットのダウンロードができます。 上記の必要情報が入っていれば、独自の形式をメールでお送りいただいてもかまいません。(bbs@bird-research.jp)

全国鳥類繁殖分布調査 - 日本の鳥の今を撮ろう-

HOME RESULT 参加者募集 VOLUNTEER 発行物 PUBLICATION 調査物と方法 METHOD

全国鳥類「越冬」分布調査

全国鳥類繁殖分布調査では、繁殖期の鳥たちの様子を探っています。しかし、越冬期の鳥類の状況も調べていて、調べると必要だと考え「越冬分布調査」も立ち上げることになりました。

変化している冬の鳥たち

先日、冬鳥のカシラヅカが減少が顕著ということで絶滅危惧II種に選定されました。また、ツグミなどと比べて減少していると言われます。反対におそらく過剰化により分布域が広がっている鳥もいます。この旨は調査が行なっているモニタリングサイト1000の結果から、これまで調査から進めの本年以降でし結果を見ていたのが、調査でも越冬するようになるなど、越冬分布が広がっていることが見えています。

越冬分布調査のサイト
<http://www.bird-atlas.jp/winter.html>